

右慶安二年

公儀より普く触しめされ候御書付二候、
 何方にてもさぞありがたく、畏り奉りし
 事たるべく候えども、歲月隔り候えば
 今は知る人もすくなかるべく候、かかる
 有がたき御恵の御趣意なれば、此たび
 改めて支配所百姓どもへ相諭し候間、

★普く（あまねく…広く、隅々まで）

村々庄屋・組頭より小百姓まで、この旨
 をもつて朝夕怠りなく、面々能身を
 もち、農業精出し候はば、此末たとい
 年柄よからぬ時ありとも、御年貢
 滞りなく、家族も寒餓には至るまじ
 く候、但箇條の中に商心もありて、
 身上持あげ候様にとの儀は、取ように

★年柄（としがら…その年の有様、状況）

寒餓（かんが…困窮して飢え苦しむこと）